



1906年(明治39年)2月に帰国、その功績により枢密顧問官となり、翌年子爵ししよくに叙された。

こうした外交政策の必要性にいち早く気づき、実践できたのは謙澄がただの政治家ではなく、

西洋、東洋、日本の文化について深い洞察力と、幅広い学識を備えていたからだといえる。

(文化人末松謙澄を考える会 小川秀樹)

▶ 『The Risen Sun』
(昇る旭日)

ヨーロッパ滞在中に、新聞、雑誌に寄稿した論文、演説の草稿などをまとめた本。謙澄の博識とヨーロッパでの精力的な活動がうかがえる。



今回は末松謙澄の文化、学芸に対する深い造詣が導いた外交上の功績にふれたい。謙澄が第三次伊藤内閣の逓信大臣、第四次伊藤内閣の内務大臣を務めたことはよく知られるが、これから記すのは大臣の職を辞した数年後、日本の命運を背負った国際外交の舞台での活躍についてである。

「外交の舞台で活躍」

1904年(明治37年)2月、我が国は薄氷を踏む思いで日露戦争に突入した。大国ロシアとの戦争は、小さな島国日本にとって国の存亡賭けた戦いであった。軍事力も経済力も大きく劣る日本が勝利するためには、欧米諸国の支援や協力が欠かせなかった。そのことを十分認識していた謙澄は、日本の立場や、戦争に至る経緯を欧米諸国に理解させ、それらの国々の世論を味方につけることが必要だと考えた。開戦前からこのことを伊藤博文や山県有朋に建言し、自らその任務に当たることを申し出た。開戦直後謙澄は、戦時外交の一端を担うために旅立った。向ったのは若き日に留学したイギリスである。

現地ではイギリスを中心にヨーロッパ諸国の世論を日本に有利に導くため論文執筆、新聞への寄稿など精力的にこなした。このころ欧米ではアジア人を脅威おうかつんと考える黄禍論が唱えられ、この解消にも力を注ぐ必要があった。謙澄は幅広い知識と優れた語学力を駆使してアジアや日本に対する偏見を除き、イメージの改善を図った。論文や演説の内容は歴史、文明論、教育、道徳、芸術など多岐に及んだ。さらに開戦にあたり国際法上の違反があったのではないかという日本への批判に対しては、豊富な法学の知識で的確に反論した。

謙澄は日露戦争のほぼ全期間を通して、日本の好感度を高めることに持てる力を遺憾なく発揮した。自らの能力や知識が、日本の勝利に貢献したことで謙澄も面目躍如たるものがあつたであろう。